

□ 瀬古利彦氏講演会

『心で走る〜私のマラソン人生〜』

DeNAアスレティクスエリートアドバイザー

瀬古利彦氏



日本のマラソン界
再建を託される

数々の大会で優勝、世界のトップランナーとして活躍してきた瀬古氏。現役時代は「走る修行僧」といわれたが、いまTVやラジオでみせる素顔は明るく冗談が多いのを知っている。期待に違わずジョークを交えての講演は笑いが絶えなかった。

低迷していた男子マラソンが最近強くなってきた。十五年以上も更新されなかった日本記録が四回出て活気を取り戻している。オリンピックの東京開催が決定したこと、厚底シューズの開発、日本記録を出すこと、報奨金がもらえるということに加え、設楽悠太選手と大迫傑選手のように、お互いをリスペクトしながら強くなるライバルの存在も大きい。瀬古氏も宗兄弟というライバル

記念講演会

心で走る〜私のマラソン人生

講師 DeNAアスレティクスエリートアドバイザー 瀬古利彦



がいたから今の自分がいると言つ。

大学に入ったとき中村清監督から「宗兄弟は一日に四十キロ走を二回、五〇〇メートルを全力走八本の練習をしている」と聞いて練習量の多さに驚く。彼らに勝つため、まずは「性格を悟られないために仲良くなれない」と決めたそうだ。一月、雨の中での練習は寒くてイヤだったが、宗兄弟が練習していると思えば、それ以上に練習した。

瀬古氏が小学二年生のときに開催された東京オリンピック（一九六四）。日本の円谷選手は三位で銅メダル。陸上で獲得した唯一のメダルで日本人に大変な感動を与えた。四年後のメキシコオリンピックでは円谷選手のライバルであった君原選手が銀メダルをとり、マラソンはテレビを通して日本人に感動と

勇気を与えるスポーツとなった。しかし最近の入賞を逃している。東京

オリンピックでのメダル獲得に向けて、日本マラソンの再建を託された瀬古氏が考えたことは二つ。一つは新しいマラソンの選考会、マラソングランドチャンピオンシップ(MGC)の創設。そして若い監督・コーチ・選手たちの意識改革である。日本新記録が出ないのはムダ(無謀)ともいわれる練習をしていないからではないか。中村監督の言葉「継続は力なり。されど情性の継続は退歩。毎日新鮮な気持ちで練習しているか」。瀬古氏が勧めたムダに思える泥くさい練習は昭和的で論理的でないと言われたが、実行したのは川内優輝選手。ボストンマラソンで瀬古氏が優勝した一九八一年以来三十二年ぶりに優勝した。



手作りの金メダルは宝物

師事した中村清監督から「若いときに流した汗は老いて涙となって流れるから、いま一生懸命に汗をかけ。そうしたら将来強い選手になる。練習で泣きなさい。試合で笑える人間になれ」という教えを受けて三回オリンピックを目指す。モスクワオリンピックは絶対調で優勝する気だったが、日本はボイコット。次のロサンゼルスオリンピックは宗兄弟とともに日本代表に選ばれたが、プレッシャーでオリンピック前に血尿が出て母親に電話口で泣き言、それで気持ちが悪くなったと言った。「聞いてくれる人がいることは大切。だから若い選手には頑張りではなく困っていることはないか?と声をかけるようにしている」とのこと。ソウルオリンピックは練習を頑張り過ぎてケガをして九位。

気落ちしてソウルオリンピックから帰ったとき、家族は手作りの金メダルを作って出迎えてくれた。それは黄色の紙で作った金メダル。お父さんは金の「ん(運)」がなかったから「き(黄色)メダル」。

マラソン界のレジェンド瀬古氏、これからも陸上競技やマラソン選手の育成に尽力していただき、様々な記録更新が出ることを期待したい。

令和四年六月六日(月) 十六時
名古屋観光ホテル3F 『那古の間』



※この記事は令和四年六月六日(月)の講演のレポートです

(文責)公益社団法人名古屋西法人会